

狭間に住まう - 旧道をつなぐ路地の設計 -

稲用研究室 村澤昌樹

「街道は生きている」

杉並区において、利用されることが少なくなってしまった歴史のある道。

私は日一日とそこなわれているその道をとどめておきたい。

そこで私は建物間に偶発的に生じる隙間、商業都市と比べ、住宅都市においては建物間の隙間の活用が少ない隙間に注目した。

本設計では、このような隙間に路地のような空間ポテンシャルを与え、敷地に反映させることで、旧道へと誘う隙間の空間、路地における人々の関わり合いの提案を行う。



<Quote>

「街道は生きている」

血のかよう昔ながらの姿をいつまでも伝えようと唯一すじに生きてきた街道。現実には日一日と昔の姿が失われ、そこなわれそのとどまるところを知らない。郷愁も感傷も切実な時代の要求の前にはいかんともしがたいのであろうか。せめて今ある姿だけでも記録にとどめ僅かでもおもかげを偲び慰めることができればと思いつつ、また少しでも昔のおもかげをとどめておきたいものと、心から願っているのだけれど...

(東京都杉並区立中央図書館長より)

<Background>

建物間に偶発的に生じる隙間。

杉並区などの住宅都市では、そのような隙間の活用があまりされておらず、建物1つ1つが孤立したものとなっている。

本設計では隙間のポテンシャルを見出すことで、地域住民との交流を生じさせる。

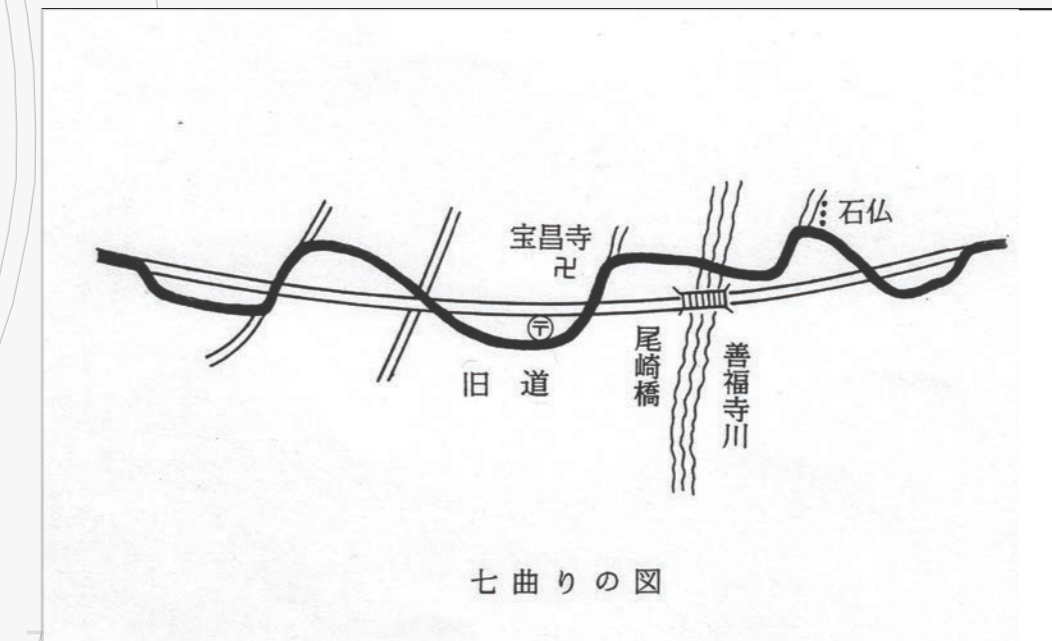


<History>

東京都杉並区において、江戸時代から地廻り経済の重要なルートの一つであり、沿道の村々の生活道路が結び合わされたような性格をもつ五日市街道。

そのなかでも成田東二丁目から成田西二丁目へ続く道は坂道、直角やカーブした曲り道が多く、歩行者や荷車の通行の名だたる難所として「尾崎の七曲り」と呼ばれていた。

現在、この「尾崎の七曲り」は新たな幹線道路に改修されたため、この道を利用する人が減少した。さらには新道がつくられたことにより、旧道との間に不整形な土地が発見された。

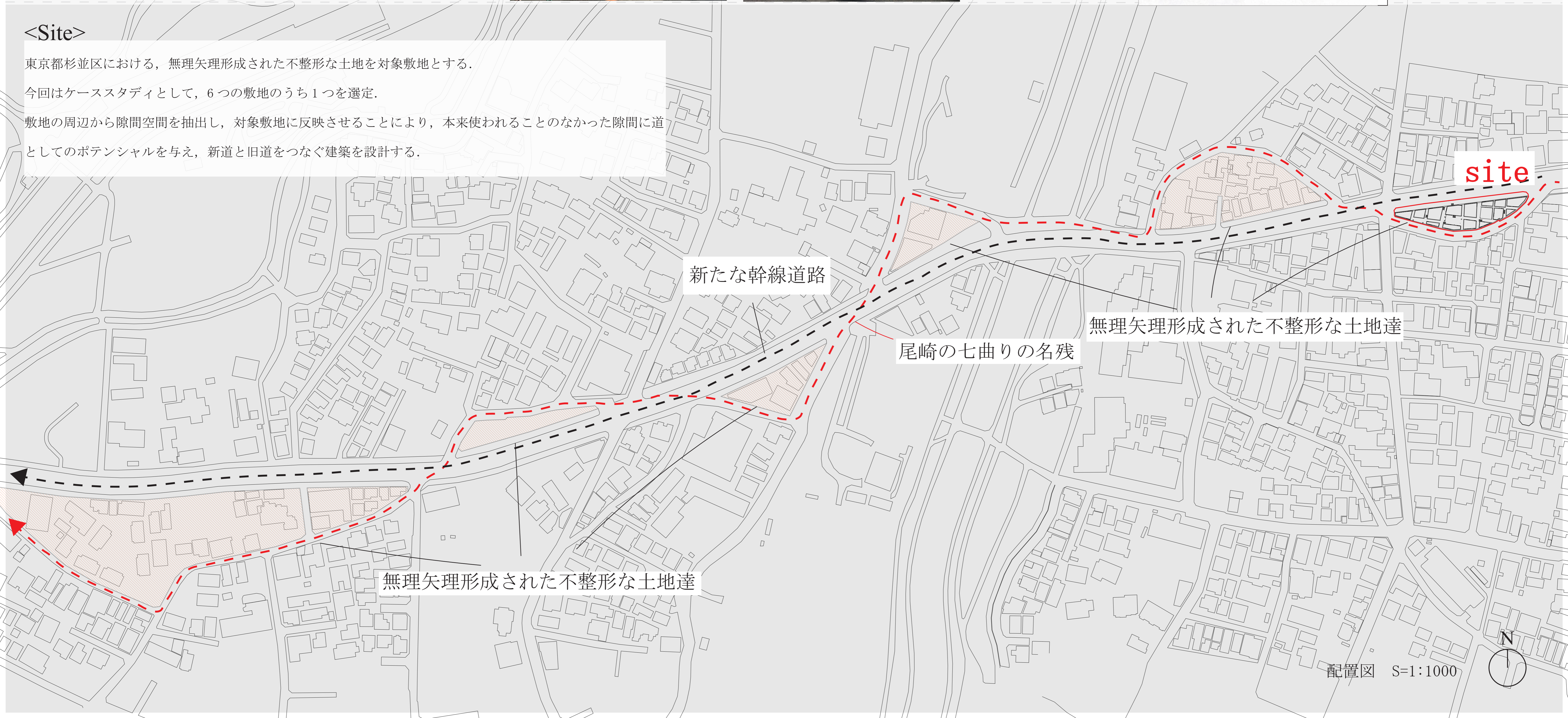


<Site>

東京都杉並区における、無理矢理形成された不整形な土地を対象敷地とする。

今回はケーススタディとして、6つの敷地のうち1つを選定。

敷地の周辺から隙間空間を抽出し、対象敷地に反映させることにより、本来使われることのなかった隙間に道としてのポテンシャルを与え、新道と旧道をつなぐ建築を設計する。

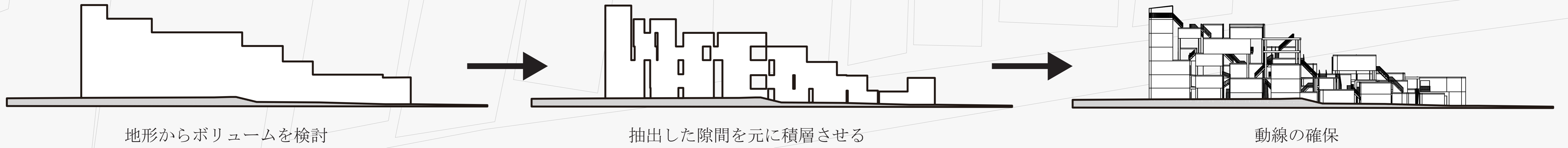


配置図 S=1:1000



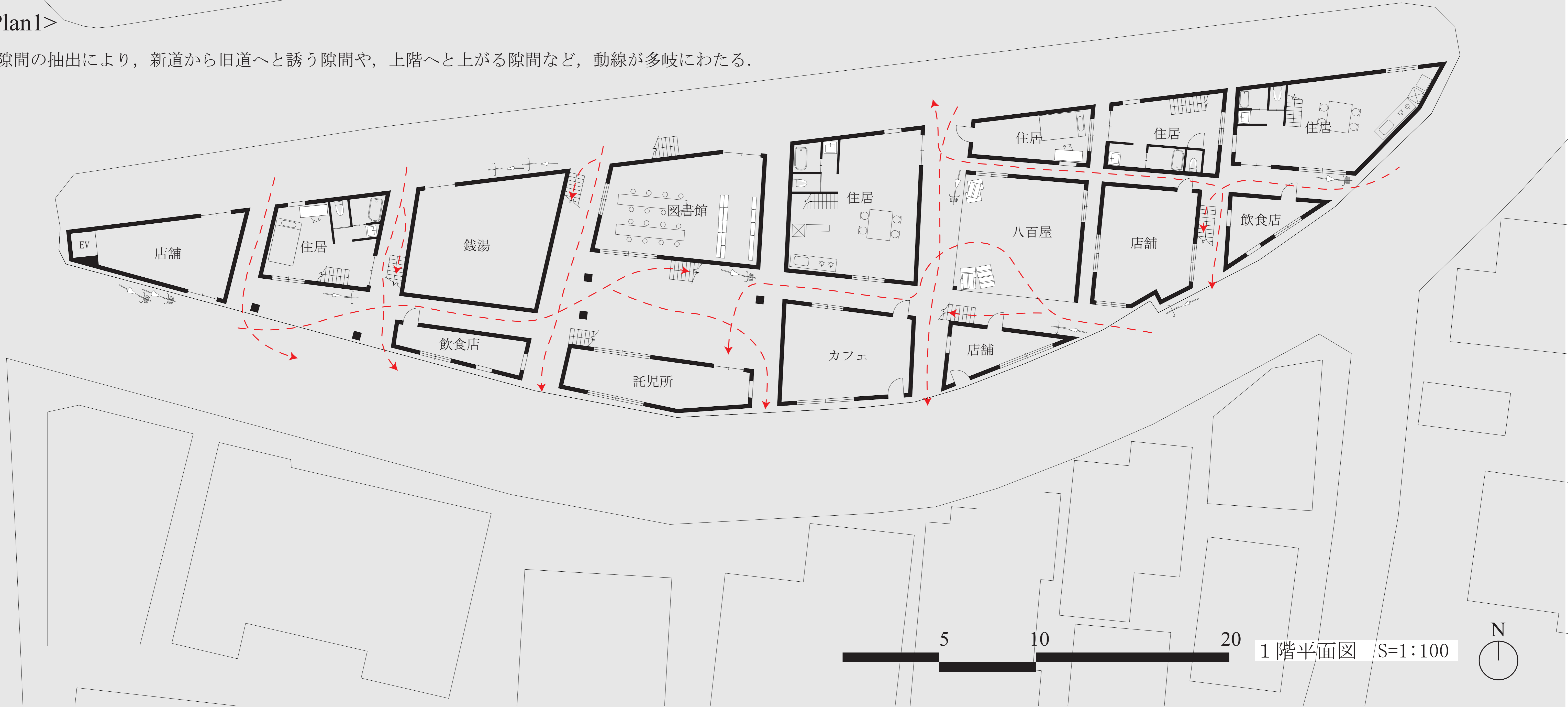
<Method>

地形から全体のボリュームを検討し、周辺から抽出した隙間を対象敷地内に挿入し、それを基に積層させることで、小規模の建築の集合体を形成させる。



<Plan1>

隙間の抽出により、新道から旧道へと誘う隙間や、上階へと上がる隙間など、動線が多岐にわたる。

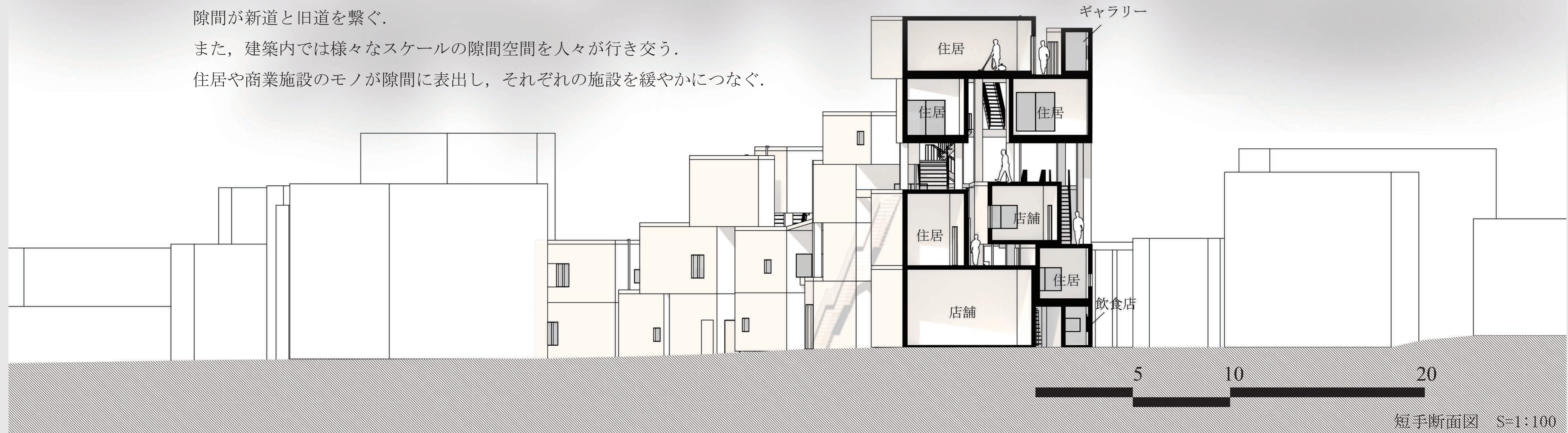


<Consist>

隙間が新道と旧道を繋ぐ。

また、建築内では様々なスケールの際間空間を人々が行き交う。

住居や商業施設のモノが隙間に表出し、それぞれの施設を緩やかにつなぐ。

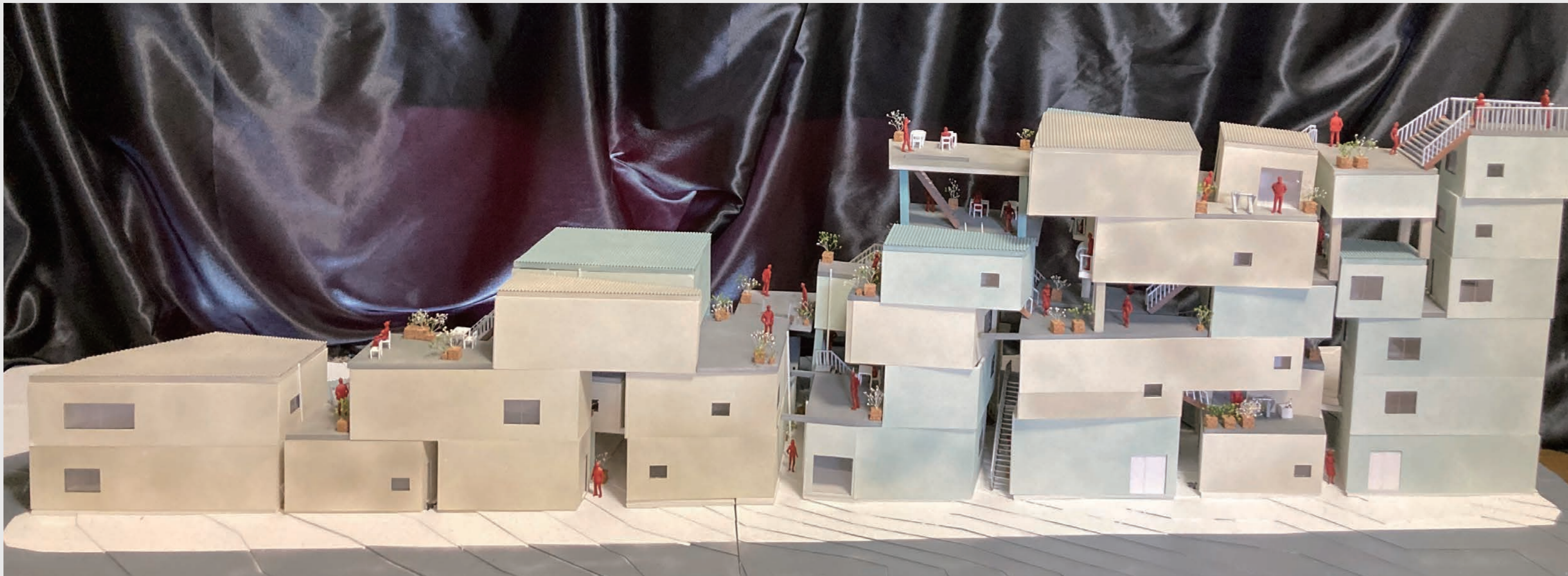


小規模の建物を隙間を介して積層させることにより、フレッシュエアが建築を通り抜ける。
新型コロナウイルス流行化においても有効な建築となるのではないだろうか。



<Surface>

新道と旧道から立面をみる。
開口の開け方，ボリュームの積み方を道によって変える形態操作を行う。
新道からみると閉鎖的な，旧道からみると開放的な印象を与える。



新道からみる立面

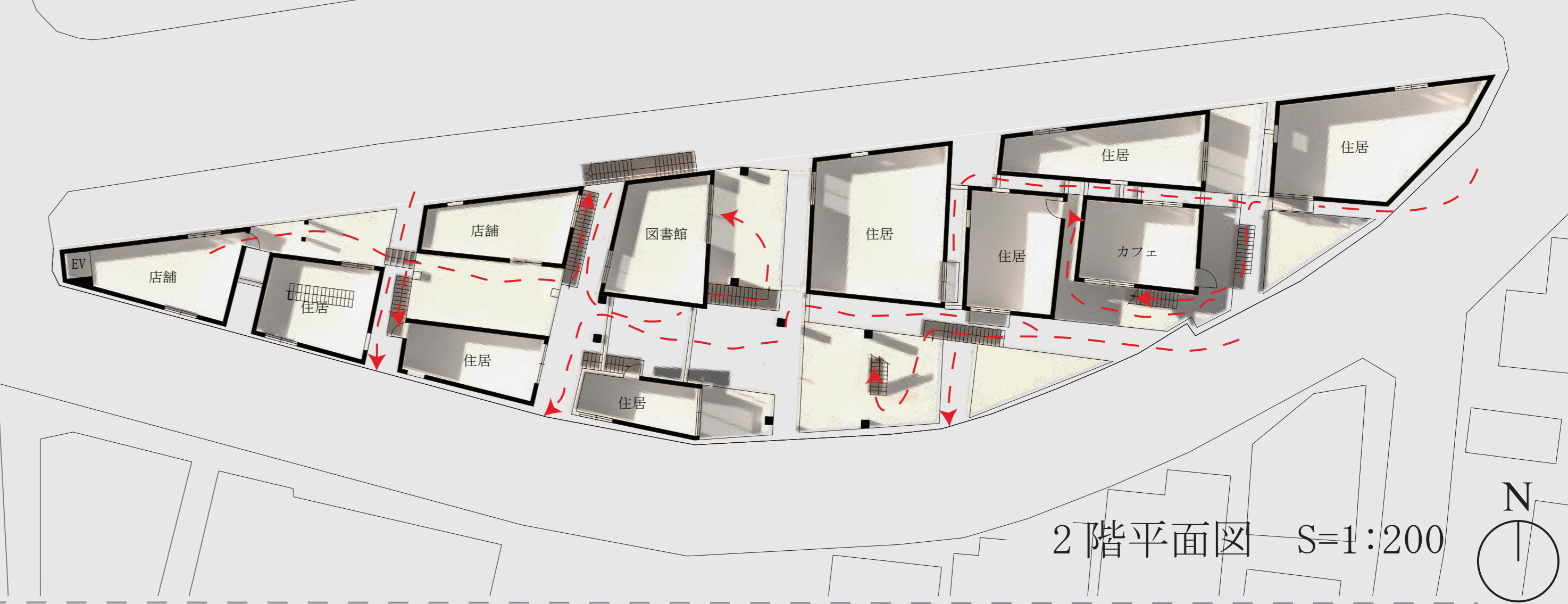


旧道からみる立面

<Plan2>



3階平面図 S=1:200



2階平面図 S=1:200

新道から旧道へと繋ぐ隙間たち



<Perspective>

多くの異なる隙間が建築内に点在することで、様々な空間体験をすることができる。



展望台へと続く隙間。
狭い隙間を通り開放的な空間へ行く。
ふと横をみるとギャラリーがあり、人々を誘う。



最も広い隙間。
辺りを見回すと、様々な人の動線を見ることができ、狭い隙間の多い建築内において、他の人の存在を確認することができる。



少人数のたまり場となる隙間。
他の場所へと行くことはできないが、他の隙間と視線で連続的に繋がる



住居間にある狭く、暗い隙間。
奥にどんな空間が広がっているのか想像掻き立てる。



住居と地域住民との交流が生まれる隙間。
住居のベランダのような役割があるとともに、地域住民が通る道ともなる。